

言語接触による機能範疇の統語的变化：

隔離児の英語とピジン英語の比較*

田口茂樹・迫間文華

1. はじめに

「虐待」という表現を耳にした際、大抵の人は身体的な暴力などを想像するであろう。しかし、この表現が、「言語」という言葉と結びついたとき、それは暴言、侮辱、悪態などといった、言葉の暴力で弱者を追い詰め、傷つけることを意味する。身体的な虐待が肉体や心に大きな傷痕を残すのと同様、言葉の虐待・暴力が人間の精神活動に大きなダメージを与えることがあるという。例えば、親などからの暴言による虐待を受けた子供は、脳に対するダメージが原因で、コミュニケーションが困難になることが報告されている（友田（2018））。特に、言語野の1つであるウェルニッケ野は、聴覚野に属しており、言葉の理解や会話など、コミュニケーションに重要な役割を果たしているとされている。言葉による虐待によって聴覚野が損傷を受けるということは、聞きたくない言葉から本能的、無意識的に自らを遠ざけようとする余り、「聴く」という能力そのものが衰退していった結果だと考えられる。即ち、人間の言語は、たとえ生得的な言語能力として備わっていたとしても、外部からの言語情報のインプットを拒絶し、十分な刺激が受けられない場合には活性化されないことになる。つまりは、Chomsky（1986）がいうところの、「プラトンの問題」である。

本稿では、外部からの言語情報の有無が、言葉の発達にどのような影響を及ぼすかについて、理論言語学の立場から考察を行う。具体的には、以下の二つの事例を考察する。一つ目は、やや特殊な環境で言語を身に付けた隔離児の例である。Curtiss（1977）で紹介されたGenie（仮名）という少女の例を用いて、言語情報から隔絶された状態で一定期間を過ごし、臨界期を経た後に言語を習得していく過程を検証する。二つ目は、言語間の接触、中でも英語を媒介とした接触に焦点を

絞り、いわゆるピジン (pidgin) における統語的中立化や、文法化 (grammaticalization) 及び脱文法化 (degrammaticalization) に関する議論である。

第2節では、Genieの置かれた環境と、それが言語に反映されたと思われる言語データについて述べる。彼女は幼くして父親によって監禁され、13歳になるまで言葉に触れない環境で生活することを余儀なくされた。ようやく救出されたものの、当然のことながら彼女はほとんど言葉を話すことができなかった。Curtiss (1977)におけるデータを観察したところ、救出当初は一語文の発話や、失文法症患者に多くみられる機能範疇の脱落などが顕著であることが分かった。しかし、年を経るに従ってGenieは「文法」らしきものを習得する。その文法が、失文法症患者にみられる機能範疇の「喪失」とは異なり、その「欠落」を示唆している点は、文構造における語彙範疇と機能範疇を明確に区別する生成文法理論への経験的な証拠といえる。

第3節では、生成文法理論における機能範疇の扱いと理論的変遷について述べる。第4節では、再度Genieの英語に目を向け、機能範疇に焦点を当てて詳細に検証する。どの機能範疇が統語上どのように具現されているか、或いは欠落しているかが議論の中心となる。具体的には、限定詞句における数素性 (number feature)、時制辞句における時制素性 (tense feature)、及び限定詞句と時制辞句が共有する人称素性 (person feature) を対象として分析を行う。第5節では、第2節でみるGenieの文法と、ピジンに広くみられる文法との共通点を指摘する。数素性と時制素性が統語的に具現されないという共通点を手がかりに、言語間接触によるピジンと、Genieの英語における機能範疇の性質についての一般化を行う。第6節は結語に加え、今後の課題を提示する。

2. 虐待による言語への影響

本節では、長年の虐待が言語へどのような影響を及ぼしているのかを、Curtiss (1977)によって記述されたGenieの英語を例に概観する。

まず虐待には、身体的虐待、心理的虐待、ネグレクト、性的虐待があり、1種類だけの虐待を受けていた人は少ないと言われている。言語に関する虐待については、Teicher (2016)では以下のように報告されている。言語的虐待を受けた子

どもたちは、言語野に対して大きな影響を受けており、特にブローカ野とウェルニッケ野、つまり言語生産と言語理解の機能がある部位への影響が顕著だという。また、この部分にひどくダメージを受けた人ほど言語理解スコアが低かったという結果も出ている。Teicherが対象とした子どもたちは、親から「生まれてこなければよかった」、「何でああなたは他の兄弟や近所の子どもみたいにできないの」、といった人格否定的な発言に晒されており、それが左脳の言語を司る部分に影響を与えたと考えられる。

次に、Teicherの研究結果を踏まえ、Curtiss (1977)で紹介されたGenieの英語と、その検証結果についてみる。下記の(1)は、Genieが13~14歳の頃の言語能力を示すデータである¹⁾。13歳で保護された当初のGenieの言語力は、名詞や方向を表す不変化詞といった具体的な表現を用いて会話ができるレベルに達してはいたものの、完結した文を生成することはできないことが見て取れる。即ちGenieは、保護された時点で、ある一定のレベルまでの語彙範疇、及び移動や空間表現に関する語彙は習得していた、或いは習得する力を備えていた、と考えられる。

(1) [Genie (以下G) が眼鏡を建物の屋根のうへほうりあげてしまっていた。K博士 (以下K) がやってきて、Genieが眼鏡をはめていないことに気づき、質問した。]

K: Where are your glasses?

[GはK博士を外へ連れて行き、屋根を見て笑った。]

K: We'll have to get the ladder.

G: Ladder.

[屋根をさしながら]

K: The glasses are up there.

G: Up. Up. Up.

(Curtiss (1977) : 日本語訳、p. 28)

Curtiss (1977) は、Genieに対する質疑応答を基に、彼女が2、3の語を理解することはできるが、英語を母語として習得したとはいえないと結論づけている。

正常児であれば大人から言語を学ぶという時期に、Genieは監禁生活を余儀な

くされた。その結果、13歳になるまでの間、外界から言語的の刺激を受ける時期がほとんどなかったことで発話の能力に欠陥が生じたという事実は、上にみたプラトンの問題が具現化されたものと言えよう。この観察は、Teicher (2016) と友田 (2018) の研究結果からも裏付けられている。即ち、言葉の虐待は言語発達に関して複雑かつ多様な影響を及ぼしているということである。

今回参考にする Genie の事例に関しては、性的虐待は含まれていないが、身体的虐待、心理的虐待を同時に受け、父親から母親に対しての暴言やDVを見聞きしていたことが記されている。即ち、完全な隔離児とは異なり、ある程度の言語刺激はあったということになる。Teicher や友田の研究を踏まえると、Genie の場合、聞きたくない言葉から本能的、無意識的に自らを遠ざけようとした結果、聴覚野が萎縮し、言語習得に問題が生じたと考えられる。

本稿での重要な学術的問いは、物理的な脳の損傷ではなく、精神的な虐待による脳へのダメージが、言語発達のどのような面にどのような影響を及ぼすのか、という点である。保護された時点、またその後間もない時期に2、3語からなる原始的な発話が可能であったことから、Genie の脳は動詞、名詞、形容詞などの語彙範疇、及び場所や方向といった可視的な言語表現を司る部位に関しては重度の影響を受けていなかったことが考えられる。したがって、ここでは機能範疇、特に数素性や時制素性、人称素性に関与するTとDに焦点を当て、Genie が臨界期を過ぎた後に接した英語の発達を検証する。また、Genie の英語に類似した現象がピジンにもみられる点を指摘し、本研究での結論が妥当であるか否かについて考察する。

3. 生成文法理論における機能範疇

前節では、Genie の英語の欠陥が、機能範疇の未習得に由来する可能性が高いことを示唆した。ここでは、Chomsky (1981) 以降の、いわゆる統率・束縛 (Government and Binding, GB) 理論、Chomsky (1995) 以降のミニマリスト・プログラム、及び Rizzi (1997) 以降のカートグラフィー理論における機能範疇の扱いと理論的変遷を概観する。まずは (2) のような、疑問詞を伴う直接疑問文を例を考察する。

(2) What did you buy?

初期の生成文法理論では、句構造規則によって作られた深層構造から、変形規則によって表層構造が生成される仕組みが研究の中心であった。つまり、格や屈折などによる語形変化はさほど重視されず、主な関心は語順の変化であった。ただし、疑問文などにおいて語順変化に関与する助動詞は重要な考察対象となっていた。例えば、英語における法助動詞の *can (could)*、*may (might)*、*will (would)* などはもちろん、肯定文や平叙文では具現されない虚辞の *do* が挿入・移動される派生については詳細な研究がなされている。これらに加え、進行形を表す *be-ing*、完了形を表す *be-en* などが、助動詞 (auxiliary, Aux) という範疇に生成されるものと考えられるようになった。そして、Aux に属する要素にはおしなべて時制が関与することから、文 (sentence, S) が、屈折辞 (inflection) という機能範疇を主要部とする屈折句 (Inflectional Phrase, IP) として再定義された。つまり、語彙範疇と機能範疇が、独立したカテゴリーとして文法体系に組み込まれたということである。その後 IP を、時制情報だけを担う時制辞句 (Tense Phrase, TP) と、格、人称、性、数といった一致情報を担う一致要素句 (Agreement Phrase, AgrP) とに分離する案も提唱された (Pollock (1989) 他参照)。さらに、均一性 (uniformity) の観点から、TP 以外にも、語彙範疇にはそれと密接な関係を持つ機能範疇が想定されるようになった。例えば、名詞句に対しては、格、人称、性、数に関する情報を担う限定詞句 (Determiner Phrase, DP) が設けられた。現在では、動詞句に対する機能範疇として、動作主の意味役割と、目的語に対する対格付与を担う小動詞句 *vP* が存在すると考えられている。また、補文標識 (complementizer) を収容していた *S'* は、IP/TP を支配して文のタイプを決定する補文標識句 (Complementizer Phrase, CP) という機能範疇として位置づけられ、それがさらにカートグラフィー理論において精緻化されることとなる。チョムスキー理論では疑問文などの限られたタイプと関連付けられてきた CP は、カートグラフィー理論ではそれらに加えてトピック句 (Topic Phrase, TopP)、フォーカス句 (Focus Phrase, FocP) のように、談話特性を持つ機能範疇として独立した投射と階層構造を与えられ、その内部での移動操作に対する諸制約を基に統

語的な分析が行われている。

一致要素句 AgrP に関しては、標準英語においても既に簡略化が著しく進んでいること、また Genie の発話にはほとんど出現しないことから、本研究では考察の対象外とする。また、小動詞句 *v*P に関しては、英語における対格の形態変化が代名詞に限られている点、また、動詞自体に目的語との一致を表す形態変化がみられない点を踏まえて考慮に入れないものとする。さらに、CP に関しては以下に軽く触れるが、TopP、FocP に関しては、文のタイプや談話特性といった、極めて高い対人機能を要求する機能範疇であることから、考察対象から除外する。したがって、本研究では、数、時制、人称に関与する TP と DP に焦点を当て、Genie の文における機能範疇の発達を考察する。

4. Genie の英語と機能範疇

本節ではまず、Genie の英語の特徴を、語彙範疇と機能範疇の発達を基に概観する。保護されて間もない Genie が発していた文は一般的にいう二語文である。(3) のように文として成り立たず、名詞や動詞をいくつか組み合わせることで、かろうじて自分の意思を人に伝えていることが分かる。(3)a は、K に対して先生が来ることを伝えるときの発話である。進行形を表す *be-ing* や助動詞の *will* など、時制を表す表現は全く使用されず、主語と述語のみが「文」としてつなぎ合わされている。(3)b は大きなカメを見た時の発話であるが、正常児の一語文と比べて特筆すべき点はみられない。しかし、(3)c では、*go* の過去分詞 *gone* が使われており、一見したところ「時」という概念が時制として文法に反映されているような印象を受ける。

- (3) a. Doctor, ……… come.
b. Big.
c. Balloon. Gone.

(Curtiss (1977) : 日本語訳、p. 19)

(4) では、二語文は話すことができるようになり、 G_1 の *is washing* にみられ

るような進行形の習得が観察される。しかし、G₂の *people* に対する所有格の *-s*、G₂の *two car* に対する複数の *-s* などを司る機能範疇は発達していないことが分かる。特に、複数という概念については、G₅にみられる *blue and orange car* という等位接続表現が興味深い。Genieは、複数の車を見たことを認識してはいるものの、*blue and orange cars* という適格な複数表現はもちろん、*blue car and orange car* のような反復を用いて複数の概念を言語化していない。

- (4) G₁ : At school is washing car.
M : Whose car did you wash? ²⁾
G₂ : People[s] car.
M : How many cars did you wash?
G₃ : Two car[s].
M : Were they big cars or little cars?
G₄ : Big car.
M : What were the colors of the cars?
G₅ : Blue and orange car.

(Curtiss (1977) : 日本語訳、p. 36)

(5)は、Genieが過去に父親から受けた虐待について述べた発話である。現在・過去同形である *hit* については考慮から除外すべきであろう。三人称・単数・現在の *-s* が身に付いているかどうか定かでない段階にあるため、これを過去形の使用と断定することはできないからである。一方で、*make*、*take*、*is* のように現在形が現れている点から、Genieは現在形に関しては時制の概念を統語的に具現しているようにもみえる。しかし、以下では、Genieが人称や数、時制といった「概念」を持つてはいるものの、それを言語化する機能範疇が欠損していることをみる。この結果、*be* 動詞のような不規則変化動詞に関しては、確率的に最も触れる回数が多い *is* を原形としてレキシコン (語彙目録) に蓄え、それに機能範疇を投射させることなくそのまま言語化していると分析することができる。これは、(4)のG₁において前置詞句と動詞句を *is* がコンピュータとして結びつけている事実とも合致する。

- (5) a. Father hit big stick. Father is angry.
 b. Father hit Genie big stick.
 c. Father take piece wood hit. Cry.
 d. Father make me cry.
 e. Father is dead.

(Curtiss (1977) : 日本語訳、p. 48)

(6) の G_8 における *did* についても、(5) における *is* と同様の見解が可能だと考えられる。この *did* は、M による直前の質問を真似たようにもみえるが、別の解釈も可能である。すなわち、*paint* という動作を強調しているのではなく、Genie のレキシコンには、過去を概念を表す動詞が *did* としてインプットされているため、助動詞としてではなく *did-V* という複合動詞の形で発話に現れているという可能性である。つまり、厳密に過去であることを伝達する必要がある場合には、通常語形変化を用いない Genie でも、*did-V* という複合動詞を過去形として代用していると分析できる。

- (6) G_6 : Genie have yellow material at school.
 M : What are you using it for?
 G_7 : Paint. Paint picture. Take home. Ask teacher yellow material. Blue paint. Yellow green paint. Genie have blue material. Teacher said no. Genie use material paint. I want use material at school.
 M : You wanna paint it or are you trying to tell me you did paint it?
 G_8 : Did paint.

(Bickerton (1990、p. 117))

Prévost (2008) は、中間言語には時制辞 T は存在するが、それが動詞の活用形になって現れないと述べている。しかし、Genie の言語がそれに該当するか否かは疑問である。例えば (6) の G_7 では *want to use* ではなく *want use* が使われており、不定時制の TP すら具現されていないことから、T が不完全な状態で言語

化されているのではなく、完全に欠落しているとも考えられる。注目すべきは、こういった例がTだけに限定される現象ではない、という点である。上にみたように、数や格を司るDについてはほぼ欠損しているとみなせることから類推すると、Tのみが不完全であると考えより、機能範疇全般が欠損していると分析する方が一般性が高いと思われる。また、生成文法理論における均一性及び機能範疇の自立性を鑑みて類推すると、補文標識句のCPも欠損している可能性が高い。だとすれば、G₇における *Teacher said no.* についても、*no* を直接引用したのではなく、*that* に導かれるCP、即ち間接引用の補文構造を投射する機能範疇が存在しないという可能性も考えられる。しかし、*no* の引用形式が直接引用であるか間接引用であるかの区別は極めて困難である。特に話し言葉においては、正常児であるか隔離児であるかに関係なく、老若男女を問わず多用される表現であるため、その境界線は曖昧である。Genie本人の英語或いはその他類似した環境で生じた英語における複文構造のデータを詳細に検証する必要がある。

5. Genieの英語とピジン英語

本節では、Genieの英語に類似した英語としてピジンを取り上げ、両者の比較を通して機能範疇の性質について述べる。時制を司るTや、名詞の人称、数、格、性などを司るDの統語的具現を検証し、「新たな言語」がどのように生まれるか、そしてその過程での機能範疇がどのように継承され変化していくのかをみる。通常、言語接触の結果起こるのは融合 (syncretism) を初めとする中立化 (単純化) であるが、本節では、それに加え、語彙範疇が機能範疇として用いられるようになった文法化や、逆に機能範疇が語彙範疇として用いられるようになった脱文法化、そして文法化した語彙範疇がモダリティ的要素を含んだCのように用いられるようになった例を紹介する。

ピジンは、中国語における「ビジネス」という語から転じて生まれたとも言われている (林 (1981) 他参照)。すなわち、英語を第一言語としない話者同士、或いは英語を第一言語としない話者と英語のネイティブ・スピーカーとの間でコミュニケーションを取るために使われた、ある種の「人工言語」である。身近な例では、商業や貿易などで「公用語」として使われてきた英語が、そういったピ

ジネス的な営みを通して接触を繰り返した結果、屈折変化や語形変化が単純化して現在の標準英語が生まれた現象などが挙げられる。生成文法の基本的な考えである生得性仮説 (innate hypothesis) に基づいて考えると、Genie は彼女なりの言語を持っており、監禁状態から解放された後、実際に用いられている英語と触れることで、いわば「Genie 語」と英語との接触による中間言語を生み出したともいえる。以下、英語の発達段階で中立化がもっとも多くみられた機能範疇の T と D に焦点を当て、ピジンの形態変化について検証する。

まずはカメルーン・ピジン英語 (Cameroonian Pidgin English) の動詞の屈折変化をみてみよう。

- (7) a. A go.
I go
'I go.'
- b. Yu go.
You go
'You go.'
- c. I go.
he/she/it go
'He/She/It goes.'

(中尾 (2010, p. 85)、表記等一部修正)

(7) から分かるのは、以下の二点である。一点目は標準英語と同様、必ず主語が表現されている点である。文脈上省略されることがあるのかどうかは定かではないが、これは、日本語のように主語を代名詞によって明示化することが少ない言語とは大きく異なる点であるといえる³⁾。二点目は、一人称、二人称、三人称の区別が主語側のみの語形変化として現れており、動詞側には活用や屈折変化と言った語形変化がみられないという点である。両者をまとめると、カメルーン・ピジン英語では、人称という概念の違いは十分に認識されていながらも、それを T によって表現するという文法的な規則は存在しないということになる。ただし、カメルーン・ピジン英語では、時制を表す文法表現が全くないというわけではな

い。中尾 (2010) によると、(8) の下線部にみられるように、標準英語の *be* 動詞や助動詞の *do*、本動詞の *go* などに当たる語が助動詞として用いられ、それにより細かい時制の違いを表している。例えば、(8)aでは、*di* を動詞に付け加えることによって動作の進行を表すが、動詞自体に屈折変化はみられない。中尾によると、*di* は (8)c、(8)dの *bin* から派生したものである。(8)bでは、進行の解釈に加え、文脈によっては標準英語におけるコピュラの用法として解釈できる場合もあるという。ここで現れている *naunau* という副詞は、進行形を持たない状態述語文に対して進行の解釈を補完するために、*now* に由来する副詞の疊語によってそれを強調しているものであろう。また、(8)eの *don* は完了を表す助動詞で、標準英語の *done* に対応するものであると考えられる。(8)fの *go* は標準英語における *will* と同様に未来を表す。これは、標準英語の *go* が時の流れを表すものとして解釈された結果、助動詞として文法化したものだと推測される。

- (8) a. Di man di kam.
 the man is come
 ‘The man is coming.’
- b. Fis (h) di kos plenty naunau.
 fish be cost plenty now
 ‘Fish is very expensive at the moment.’
- c. A bin waka sotei a taia.
 I be walk until I tired
 ‘I walked until I was tired.’
- d. A bin go waka ma kombi.
 I be go walk my friend
 ‘I went to visit my friend.’
- e. Di pikin don go.
 the child done go
 ‘The child has just gone.’
- f. Di man go tek di chop.
 the man will take the food

'The man will take the food.'

(中尾 (2010, p. 93)、表記等一部修正)

次に注目したいのが、*I* 'he/she/it' の用法である。一人称の代名詞としては *A* という表現が用いられていることから、*I* は単に主語が存在しており、その主語が一人称、二人称以外である、という情報のみを表していると考えられる⁴⁾。これは、一人称として使われていた *I* から「主語」という文法機能の情報のみを取り出されて総称的主語として定着し、それに加えて、一人称、二人称と区別する必要性が生じた結果、*A* と *yu* が追加されたのではないかと考えられる。

もう一点指摘する必要がある人称変化として、主語の *dem* 'they' の語形が挙げられる。これが標準英語の *them* にもとづいて形成された形であることは、一般的な音韻変化の例を勘案すれば容易に推測できる。問題は、なぜ *them* のような対格或いは与格が定着したか、という点である。おそらくこれは過剰生成 (over-generation) の一例であろう。英語では、動詞が格を与えない統語環境では与格の *me* が用いられる。

(9) A. Who broke the window?

B. It's me.

カメルーン・ピジン英語の話者は、こういったデータに直面した結果、与格がデフォルトだとする情報を T にコピーする、或いはデフォルト格であるため素性の最少指定 (underspecification) を行う。それが複数三人称の代名詞にも適用された結果、*dem* のような与格由来の表現がデフォルトの主語として定着したものだと考えられる。さらに、中尾 (2010) は、*dem* が複数形を表す接尾辞として使われる点を指摘している。これは、標準英語の代名詞 *them* が持つ数素性が D にコピーされ、名詞句との一致 (agreement) の結果具現された形態であると分析できる。

次に、トク・ピジン語 (Tok Pisin) の例をみてみよう。この言語における機能範疇 D の振る舞いも興味深い。まず着目したいのが、カメルーン・ピジン英語で観察されたデフォルトの格と考えられる与格が、トク・ピジン語にもみられる

点である。

- (10) a. Me go.
 I go
 'I go.'
- b. Em go.
 he/she/it go
 'He/She/It goes.'

(中尾 (2010, p. 85)、表記等一部修正)

(10)aの *Me*、(10)bの *em* は、それぞれ標準英語の *me*、口語英語の *em* に由来すると思うのが妥当であろう⁵⁾。ここで、上でみたカメルーン・ピジン英語の例も踏まえ、与格をデフォルトの格として使用する例は、ある程度の一般性が認められる点を指摘しておきたい。Marantz (1991) は、対格言語と能格言語の格システムを精査し、以下のような普遍的格認可階層を提案している⁶⁾。

- (11) Case Realization Disjunctive Hierarchy
- a. lexically governed case
 - b. “dependent” case (accusative and ergative)
 - c. unmarked case (environment-sensitive)
 - d. default case

(Marantz (1991, p. 243)、表記等一部修正)

- (12) Dependent case assigned by V+I to a position governed by V+I when a distinct position governed by V+I is:
- a. not “marked” (not part of a chain governed by a lexical case determiner)
 - b. distinct from the chain being assigned dependent case
- Dependent case assigned up to subject: ergative
 Dependent case assigned down to object: accusative

(Marantz (1991, p. 248)、表記等一部修正)

GB理論の定義に従えば、主語は語彙統率 (lexical government) の対象とはならないため、(11)aには該当しない。(11)bの依存格 (dependent case) に関しては、複数の格素性の依存関係によるものである。ここでいう依存関係とは、対格言語の場合、主語に主格を与えた場合には目的語に対格が与えられる、といった条件に基づく格認可である。これを (12) と照らし合わせてみると、(10)bのような自動詞文の主語については対格が与えられる可能性はないため、*em* が依存格であるという選択肢も消去される。さらに、(11)cの‘environment-sensitive’とは、例えば名詞句や動名詞節内で主語に属格が与えられるように、特定の統語的環境においてのみ認可されるという条件を指す。このため、(10)bのような、典型的な定形平叙文においては、主語に無標格 (unmarked case) が付与されることはないといえる。となると、残された可能性として、与格は (11)dのデフォルト格ということになる。

一方、(10)bから分かるのは、*em* が三人称単数を表す代名詞の全てをカバーしている点である。にもかかわらず、動詞の語形は一人称単数と同一である。この観察を踏まえると、トク・ピシン語においては、主語の単数と複数の区別が、機能範疇同士的一致とは無関係に起こっていることが予測される。

- (13) a. Yumi go.
we go
‘we go.’
b. Mipela go.
we go
‘We go.’
c. Yupela go.
you go
‘You go.’

(中尾 (2010, p. 85)、表記等一部修正)

(13)aにおける *yumi* は、標準英語の *you* と *me* を組み合わせた、いわゆる双数形の代名詞であろう。このことは、Tが持つ人称素性はもちろん、Dが持つ複数素性も関与していないことを意味する。つまり、トク・ピシン語では、機能範疇ではなく、レキシコンにおいて複数素性が与えられているということになる。これは、第2節でみたGenieの英語と通ずるものがある。現在・過去同形である *hit* については考慮から除外したが、これは三単現の *s* が身に付いているかどうか定かでない段階にあるため、過去形の使用と断定することができないためであった。その他、*make*, *take*, *is* などは現在形で現れている点から、Genieはレキシコンにある現在形をそのまま取り出して発話をしていることを示唆した。レキシコンにおける複数形の形成は、(13)bにおける *mipela*、(13)cにおける *yupela* からも裏付けられる。Okamoto (1997, p. 63) によるトクピシンの言い換えでは、*-pela* が標準英語の *pair* に由来することが示唆されている (*tupela i poroman* 'two foreman')。すなわち、トク・ピシン語における *-pela* は、レキシコンの段階で代名詞と結合して複数代名詞を形成するという分析が自然であろう。

以上のことから、言語接触によって作られた言語、すなわちカメルーン・ピジン英語、トク・ピシン英語などの話者は、TやDといった機能範疇を、コミュニケーション円滑化のために加工していることが分かる。具体的には、標準英語の素性を削除したり、コピー・転用したりしているという分析が可能である。やはり、これらの人工的な言語においても、共通の原理とパラメータのような装置が働いていると考えるのが妥当であろう。では、Genieの英語は、普遍的な原理とパラメータとは独立した、例外的な言語なのであろうか。彼女の英語は失文法症でみられるように、いったん獲得した機能範疇を「喪失」したわけでもなければ、他言語との接触で中立化させているわけでもない。となると、Genieの言語が、普遍文法から外れた特殊なものであるのかという疑問が生じる。しかし、注目すべき点として、語順の問題が挙げられる。多少不完全ではあるものの、上でみたGenieの発話の例では、英語の基本語順であるSVOが遵守されている。つまり、基本的なXバー構造は生得的に持っており、少なくともVPレベルに関しては、その主要部前置パラメータが、両親による数少ないやりとりを通してオンに設定されていると分析できるであろう。以上の帰結として、Genieの言語の場合、普遍文法には則りつつも、機能範疇のTとDが欠落している、と結論づけるのが妥

当であると考えられる。

6. 終わりに

本稿では、外部との言語接触が、言葉の発達にどのような影響を及ぼすかについて、理論言語学の立場から考察を行った。第1節と第2節とでは、13歳まで虐待を受け、ほとんどの言語情報から隔絶されたGenieという少女について、言語発達の観点から導入を行った。第3節では、生成文法理論における機能範疇の扱いと理論的変遷について外観した。第4節では、機能範疇がGenieの文法の中でどのような働きをし、どのように発達しているかについて仮説を立てた。Genieの発話を検証し、機能範疇のDが持つ数素性と、Tが持つ時制素性を対象として、両者の統語的具現について議論を行った。第5節では、第4節でみたGenieの文法と、ピジンに共通してみられる文法的特徴を指摘し、機能範疇そのものの未習得、数素性と時制素性の喪失或いは加工といったプロセスが存在することをみた。これらのデータと議論をもとに、言語間接触によるピジンでは機能範疇が持つ素性の中立化やコピー・転用が起こっているのに対し、Genieの言語においては機能範疇そのものが喪失している可能性に言及した。

今後の課題としては、より多くのデータに基づいた、言語接触と素性の中立化に関する一般化に加え、より緻密な理論的分析が挙げられる。特に、Rizzi (1997) に端を発するカートグラフィー理論は言語発達に関する研究も期待されており(遠藤・前田 (2020) 他参照)、本稿での研究と連動させることで虐待や発達障害、失語症などにおける言語矯正へ応用されていく可能性も少なくないと考えられる。

注

* 本稿は、第二著者の研究テーマ及び収集データを基に、記述的一般化の再検証と、生成統語論による理論的分析を行ったものである。

- 1) [] 内は発話時の文脈・状況を表す。
- 2) 「M」は養母 (foster mother) を指す。
- 3) 主語の義務性が、標準英語における拡大投射原理 (Extended Projection Principle, EPP) の名残であるか否かについての議論は慎重に行う必要がある。GB理論における

EPPは、*it* や *there* のような虚辞 (expletive) を説明するのに重要な役割を果たしていた。管見によれば、カメルーン・ピジン英語では虚辞の存在は確認されていない。また、動詞の活用変化が貧弱であることから、イタリア語などの pro 脱落言語 (pro-drop language) のように、述語部分だけで主語を判断することも不可能である点から考えると、主語はコミュニケーションの円滑化のために、必要に応じて具現されていることも考えられる。この点については今後のデータ収集とその検証が期待される。

- 4) ここでは標準英語の一人称主格代名詞 *I* と対応させるため大文字で *A* と表記する。
- 5) ここでも標準英語の一人称主格代名詞 *I* と対応させるため大文字で *Me* と表記する。また、*-em* に関しては、口語表現の *kill'em all* などにおける *them* の縮約形に由来すると考えられる。
- 6) 注意すべきは、Marantz が 'case licensing' という用語を用いている点である。GB 理論では、格は指定部・主要部の一致によって付与 (assign) 或いは照合 (check) されるとされてきたが、Marantz のシステムは、格は一定の条件を満たした場合に認可 (license) されるものであるという立場を採っている。

参考文献

- Bickerton, D. (1990). *Language & species*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. (1986). *Knowledge of language: Its nature, origin, and use*. New York: Praeger.
- Chomsky, N. (1995). *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Curtiss, S. (1977). *Genie: A psycholinguistic study of a modern day "wild child."* New York: Academic Press. (日本語訳: 久保田 競, 藤永 安生. (1992). 『ことばを知らなかった少女ジーニー: 精神言語学研究的記録』. 東京: 築地書館.
- 遠藤 喜雄・前田 雅子. (2020). 『カートグラフィー』. 東京: 開拓社.
- 林 正寛. (1981). 『『ピジン』の語源をめぐって (1)』. 『一橋研究』 (6), (pp. 151-164).
- Marantz, A. (1991). Case and licensing. *Proceedings of the Eighth Eastern States Conference on Linguistics* (pp. 234-253).
- 中尾 栄裕. (2010). 「ピジン英語の現状と今後の課題」. 『英米文学』 (70), (pp. 81-117).
- Okamoto, M. (1997). The Analytical Paraphrasing Device in New Guinea Pidgin (1). 『駒澤短期大学研究紀要』 (25). (pp. 45-78).
- Pollock, J-Y. (1989). Verb movement, universal grammar, and the structure of IP. *Linguistic Inquiry*, 20. (pp. 365-424).
- Prévost, P. (2008) Knowledge of morphology and syntax in early adult L2 French: evidence for the Missing Surface Inflection Hypothesis. In Liceras, J., Zobl, H., & Goodluck, H. (Eds.), *The Role of Formal Features in Second Language Acquisition* (pp. 352-

377). London/New York: Lawrence Erlbaum.

Rizzi, L. (1997). The fine structure of the left periphery. In L. Haegeman (Ed.), *Elements of grammar* (pp. 281-337). Dordrecht: Springer.

Teicher, M. H. (2016). 「脳科学からみた子ども虐待：児童虐待・ネグレクトが及ぼす神経生物学的影響」. 福岡女学院大学大学院, 発達教育学専攻開設記念, 国際交流講演会（通訳：鈴木 華子）.

友田 明美. (2018). 「体罰や言葉での虐待が脳の発達に与える影響」. 『心理学ワールド』(80), 13-16.